演題番号：D5

一時的気管内ステント留置後に抜去およびContinuous extraluminal tracheal prosthesis（CETP）により治療した犬の気管虚脱の1例

○中森正也[1) 2)]，末松正弘[1) 3)]，谷口哲也[1)]，小関清人[1)]，浜本陽平[1)]，田畑達彦[1)]，平野隆爾[1)]

1）京都動物医療センター呼吸器科，2）乙訓どうぶつ病院，3）AMC 末松どうぶつ病院

1. はじめに：気管虚脱は中高齢の小型犬で多く認められる呼吸器疾患であり、Goose honkingや咳嗽が一般的な症状である。重度の気管虚脱に対しては、気管内ステント留置やContinuous extraluminal tracheal prosthesis（CETP）を用いた外科的矯正術が報告されている。今回、気管内視鏡検査後に気管虚脱が悪化したため、一時的に気管内ステントを留置し、後日ステントを抜去した後にCETP設置術を実施したため、その有効性を検討した。

2. 材料および方法：雑種、避妊雌、13 歳 7ヶ月、5.3kg。6 年前より興奮時の咳嗽を呈しており、2ヶ月前より咳嗽の悪化を主訴に主治医を受診した。対症療法にて改善に乏しく、原因精査のために紹介来院した。初診時に血液検査、各種画像検査、全身麻酔下でCT検査、気管内視鏡および気管支肺胞洗浄検査を実施した。これにより、胸腔入口部での気管虚脱Grade3、重度の気管粘膜腫脹や粘液貯留が認められた。検査後に浮腫が悪化したことにより気管虚脱が悪化し、気道閉塞を生じたため人工呼吸管理下で対症療法を試みるも気管チューブの抜管が困難であった。そのため、第3病日に気管内ステントを留置し、人工呼吸器から離脱させ安定化した後、第 10 病日に気管切開により気管内ステントを抜去し、CETP設置術を実施した。

3. 結　果：CETP設置後は一時的に気管粘膜の肥厚や咳嗽の悪化が見られたが、呼吸困難や縦隔気腫など合併症は見られなかった。第 130 病日に気管内視鏡検査を行い、気管炎は見られるものの気管切開部の狭窄は見られなかった。第 228 病日までの経過で、咳嗽は残存するが気道閉塞の所見は見られていない。

4. 考察および結語：獣医療において気管内ステントは気管虚脱に対して有効な手法であるが、咳嗽、ステント破損、感染、短縮、肉芽形成など様々な合併症の報告がある。設置後の生存期間中央値は 1338 日とされており、ステントの長期的な留置に関して動物や飼い主への負担を考慮する必要がある。今回、一時的ステント設置後に覚醒、安定化した後に、ステント抜去およびCETP設置術を実施して長期生存している初の報告となり、QOLも良好に維持されている。急性呼吸困難の気管虚脱症例に対し、治療法として気管内ステント留置だけでなく、それを抜去後CETPで矯正することも有効な処置だと考えた。